



貴志康一  
ベルリン・フィルハーモニー  
管弦楽団の公式ポートレート

# 貴志康一、新たな脚光

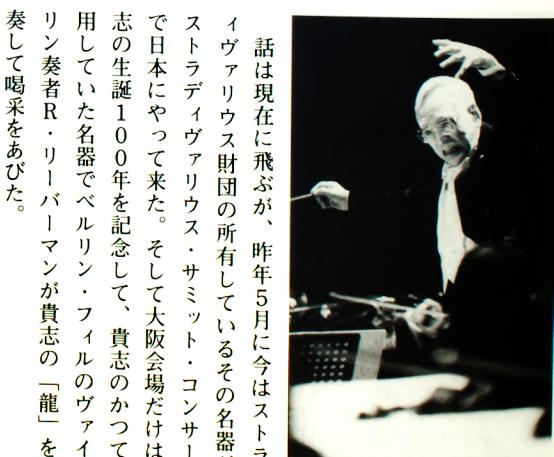
～生誕100年を契機に～

日下徳一（甲南高等学校元教諭）

昨年は1909年生まれの夭折の天才音楽家、貴志康一の生誕100年の記念すべき年であった。といっても、その前年に同じく生誕100年を迎えた。貴志と親しかった朝比奈隆ほどに貴志のことが広く話題になつたわけではない。おそらく、まだまだ貴志の名前を知らない人が多いのにちがいない。

それは貴志が朝比奈どちがつて長寿を全うすることなく、声価の定まりかけた時わずか28歳で夭折したからである。朝比奈は若いころ、短い期間だが貴志と親しくして、弦楽アンサンブルを作る話をしていたほどだ。後になつても朝比奈は貴志の指揮者としての力値を評価していく、「もし貴志君が若死にしなかつたら、僕は指揮者にならなかつたかもしれない」と冗談めかして話すことがあつた。

ところで貴志康一とはどんな音楽家だったのだろうか。彼は関西の裕福な家庭に育ち、少年時代に来日したミッシャ・エルマンを聴いてヴァイオリニストになる勉強をしていた。そして1926年、17歳のとき甲南高等学校を2年で中退してスイス、次いでドイツに留学した。ベルリン時代、20歳の彼はストラデイヴィアリウスを手に入れた。それは英国王室に買い上げられたこともある「キング・ジョージ3世」という由緒ある名器だつた。



朝比奈隆（©木之下晃）

貴志はヴァイオリンのほか作曲や指揮も試み、フルトヴェングラーに師事し、ベルリン・フィルを指揮して自作を発表するなど、ベルリン時代その活躍は華々しかつた。6年半に及ぶ留学を終え、1935年帰国後、彼は新響（現在のNHK交響楽団の前身）の指揮者に迎えられ、山田耕筰、近衛秀麿に統く新しい世代の音楽家として嘱望されている最中、盲腸炎をこじらせて1937年に28歳で没したのである。

没後は戦中、戦後の混乱にとりまぎれて、貴志のかつての名声は忘れられてしまつた。それが復活するのは、遺族が彼の楽譜など全ての音

のばかりで、歌曲4曲、「日本スケッチ」、ヴァイオリン協奏曲であつた。この演奏会はライヴ盤のレコードが出たこともある、貴志が奇跡的によみがえる端緒になつた。

それから30年近くたち、ある音楽出版社の調査で貴志は朝比奈と共に「20世紀の日本人指揮者30人」に選ばれ、作曲家としても山田耕筰らと並んで「明治から現在まで日本を代表する77人の作曲家」に選ばれるまでになつてゐる。

## 貴志の伝道師、小松一彦



小松一彦と筆者（2009.9.3、神戸文化中ホール）

現在、音楽ファンの間で貴志康一といえど、すぐ指揮者の小松一彦を思い浮かべるほど、小松は貴志の復活に力を注ぎその演奏に情熱を傾けている。もちろん東京に育ち桐朋を出てドイツに学んだ小松が、若い頃から貴志に関心を持つていたわけではない。小松が貴志を知るようになったのは、1982年に関西フィルハーモニー管弦楽団の常任指揮者として、東京から関西に赴任して来てからであつた。

小松は着任早々から邦人作品の発掘、指揮に熱心だと評判だったので、甲南高等学校では学級コンサートに関西フィルを招き、小松の指揮で「日本スケッチ」から「市場」と「夜曲」の2曲を演奏してもらつた。この日、小松は貴志記念室で「日本組曲」や「仏陀」など、日本で初演されていない貴志の楽譜を目の当たりにし、貴志の作品にあらためて注目するようになつた。

貴志はまた日本や日本人の心の美しさをヨーロッパに伝えるため、古謡や民謡という日本のメロディーをふんだんに取入れた。これが聴衆に懐かしさと安らぎを与え、音楽を聴く喜びに酔わせる。だが、それだけではない。貴志は師事したヒンデミットはもちろん、ドビュッシーやデュカスといったフランスの近代音楽からも影響を受けてゐる。

のである。やがて小松は関西フィルや東京都響の定期演奏会で、「日本スケッチ」「仏陀」「ヴァイオリン協奏曲」や「赤いかんざし」などの歌曲をプログラムに加え、いつの間にか『貴志の伝道師』を自認するようになつた。

さて、貴志の生誕100年記念行事の幕開けともいうべきシンポジウム&コンサート『時空を超える貴志康一——音楽が拓く未来』が、甲南学園と朝日新聞社の共催で1月18日、新神戸オーリエンタル劇場で開かれた時、基調講演の講師に選ばれたのは小松だつた。

小松は「貴志康一とその時代」と題して、貴志の音楽の原点やその魅力の秘密について、時にはピアノでメロディーを弾きながら、「貴志の作品は夢とあこがれと色氣に満ちていて、聴く者をワクワクさせる。特に短調から長調に変わった時がすばらしい。例えば交響曲『仏陀』の第1楽章。最初は短調で始まり、そのスラブ的な陰りのある半音が印象的だ。それから長調に転じ、のびやかで瑞々しい調べに移る。

貴志はまた日本や日本人の心の美しさをヨーロッパに伝えるため、古謡や民謡という日本のメロディーをふんだんに取入れた。これが聴衆に懐かしさと安らぎを与え、音楽を聴く喜びに酔わせる。だが、それだけではない。貴志は師事したヒンデミットはもちろん、ドビュッシーやデュカスといったフランスの近代音楽からも影響を受けてゐる。

と語った。これほど簡潔に貴志の音楽の本質に触れているものはない。

小松はまた、貴志の2番目の合唱曲集、中村茂隆編曲「貴志康一合唱曲集Ⅱ」(音楽之友社)



中嶋彰子と安永徹 (2009.3.10. ©K.Miura)

を監修し、神戸市混声合唱団を指揮して9月3日、神戸文化中ホールで初演した。前回のが4曲、今回のが5曲、これで貴志の主な歌曲9曲が合唱曲として歌われることになった。とくに今回は貴志の歌曲を代表する「かごかき」と「赤いかんざし」がはいっているので、いっそう親しみやすい。この時の9曲を収録したライヴ

貴志の生誕100年で貴志の歌曲を最も多く歌つたのは、ウイーン在住で世界的なソoprano歌手、中嶋彰子であった。

北海道で生まれた中嶋は15歳で渡豪してシドニーの音楽大学に学んだ。これは17歳で渡欧した貴志のコースに似ている。中嶋が貴志を知つたのは音大生だった頃、休暇で帰国し銀座のヤマハ楽器で何気なく「貴志康一歌曲集」(音楽之友社、1980年)を見つけてからであった。家に帰つてピアノで弾いてみると、日本的な歌曲なのにオペラのようにダイナミックで広がりがあつた。それに色彩感や表現力も豊かで、いっぺんに彼女は貴志の曲に引き込まれた。

中嶋は2004年、出光音楽賞を受賞した時、受賞者ガラコンサートで「赤いかんざし」を歌つて以来、貴志の曲をレパートリーに入れるようしている。先程述べた新神戸オリエンタル劇場でもシンポジウムのあと、中嶋は貴志の曲を7曲歌い、シェーンベルク、ヒンデミット、R・シュトラウスの歌も披露した。神戸のほか

中嶋は東京と大阪でもリサイタルを開いて貴志の曲を歌つた。どの会場も、日本人として歌う中嶋の貴志の曲は、言葉に対する暖かみがあり感性にあふれたものであつた。

中嶋が貴志を歌つたのは国内だけではない。

## 中嶋彰子、ベルリンで歌う

盤CDが近く発売される予定だ。

3月10日にはベルリン・フィルの「ランチコンサート」で、会場のフィルハーモニーのホワイエを埋め尽くした1000人近いベルリンっ子に、彼女は和服姿で情緒豊かに「赤いかんざし」などを披露して大喝采をあびた。貴志がベルリンを離れて74年。貴志が愛してやまなかつたベルリンに、貴志の曲が里帰りしたのである。

この日は中嶋の歌のほか、ベルリン・フィルのヴァイオリニストダニエル・ベルが「竹取物語」を演奏した。これは湯川秀樹博士がノーベル物理学賞を受賞した時、祝賀晩餐会で演奏された曲で、貴志がベルリンで作曲し、ピース譜もベルリンで発売されたゆかりの深いものである。

この夜ベルリン日独センターで、その日から始まつた「貴志康一、ベルリンに帰る」展(日独センターと甲南大共催)のオープニング式典もあり、そこでも中嶋が貴志の曲を披露した。「貴志展」には貴志記念室が所蔵するベルリン時代の貴志の写真や楽譜などが出品され、甲南大学からは井野瀬久美恵学長補佐らが式典に出席した。

## ベルリンの日本人 —東大でシンポジウムとコンサート

貴志の母校甲南学園は朝日新聞と共に開催で神戸でシンポジウムとコンサートを開催したが、東